

特集 さまざまな課題に対応するために

CAN-DOリストの活用法

根岸 雅史 (東京外国語大学)



「CAN-DO リスト」とは

平成 28 年度版 *NEW CROWN* (以下 28NC) では、巻末に What Can I Do? という「CAN-DO リスト」を扱ったセクションがあります。ここでは、その CAN-DO リストのページの説明をします。

2011 年 6 月に発表された「国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的施策」の中で、「中・高等学校では、各学校が、学習指導要領に基づき、生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標を『CAN-DO リスト』の形で具体的に設定すること」という提言がなされています。

CAN-DO リストとは、「ことばを使ってできる行動 (actions)」を記したもの (CAN-DO ディスクリプタ (descriptor)) をリスト化したものです。CAN-DO リストには、言語を用いた結果、「どんな行動ができるか」が示されています。

世の中には、CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment) などさまざまな CAN-DO リストがあります。しかし、これら既存の CAN-DO リストは特定の授業や教科書に対応するものではないため、実際に活用可能な CAN-DO リストを作るには、生徒の実態や教科書などを考慮しながら、長期的および中期的な到達目標を CAN-DO リストの形式で設定するという作業が必要です。

ただし英語の教科書は、基本的には「文法中心のシラバス」に基づいており、「新出文法事項の理解および活用」といった目標は CAN-DO リストの意図とは異なることに留意する必要があります。CAN-DO リストに書かれた「行動」とは、「学習指導要領」でいうところの「言語の働き」(例：苦情を言う、約

束する、招待する、など) を、ある目的の達成のために、いくつか組み合わせて遂行することと考えてよいでしょう。

28NC の CAN-DO リストとは

28NC では、教科書に対応した、それぞれの学年終了時の学習到達目標を CAN-DO リストの形で示しています。では、28NC の CAN-DO リストが、どのように作られているか見てみましょう。

技能は、大きく Speaking/Writing/Listening/Reading の 4 つから成ります。それぞれの構成は次の通りです。

Speaking は、「発表」と「会話」から成っています。「発表」は、スピーチやプレゼンテーションのように、話し手が一定の時間、1 人で話し続ける活動です。これに対して「会話」は、比較的短い発話のターンを頻繁にやりとりする活動です。「発表」と「会話」、どちらも同じような感じがするかもしれませんが、「発表」は、話し手が 1 人で組み立てていくのに対して、「会話」は、相手との共同作業です。また、「発表」は、あらかじめ準備をしたり、メモや原稿を見たりしながら行いますが、「会話」は基本的に即興で、「発表」のような準備はできません。その場で、話すことを考えて、ことばにしなければなりません。実は、Writing も同様な分類が可能ですが(例えば、「記事を書く」などは「発表」、「メール」や「チャット」などは「やりとり」のように)、28NC ではこうした区別はしていません。

Listening と Reading といった、いわゆる「受容技能」は、「要点理解」と「概要理解」という 2 つの柱から成り立っています。「要点」と「概要」は、学習指導要領の文言でもありますが、十分な理解を得

られていないかもしれません。「要点」は、「点」ですから、相手の伝えたいポイントやこちらの必要なポイントを手に入れる活動となります。それに対して「概要」は、全体としての理解が必要なものです。物語やニュースでは、登場人物や事件の場所といったポイントだけがわかって、話の全体像はわかりません。こちらは、話のあらすじや 5W1H のようなものが関わってきます。

それぞれの CAN-DO ディスクリプタは、どこからともなくやってきたものではありません。各学年の言語活動(つまり、USE の活動)と結びついています。たとえば、3 年の Speaking の最初の「発表」は、「行きたい場所と、そこでしたいことについて、メモを見ながら、発表することができる」となっていますが、これは Lesson 5 の USE Speak と結びついています。ここでは、「行きたい場所についてスピーチをする」という言語活動を行っています。ただし、こうしたスピーチ活動を行っただけで、このようなタスクが完璧にできるようになるわけではないので、補助的な「条件」を入れて、難易度を少し下げています。ここで言えば、「メモを見ながら」です。他で言えば、「資料を参照しながら」や「資料を見せながら」などの条件が入っています。

28NC の CAN-DO リストをどう使うか

① 生徒が使う場合

この CAN-DO リストは、基本的に年度の終わりに 1 年を振り返って使うことを想定していますが、それだけでなく、年度の始まりに「英語でどんなことができるようになるためにこれから学んでいくのか」を伝えることもできます。

1 年の振り返りのためには、生徒にはそれぞれの CAN-DO ディスクリプタを読ませて、判断をさせます。そのうえで、ページの下にある例のように、自信に応じて□をすべて塗りつぶしたり、半分塗りつぶしたり、空欄のままにしたりします。生徒は一覧表の塗りつぶした□を見て、達成感を持つことができるでしょうし、そこから、実際の場面で、もっと英語を使ってみようという意欲につなげることができるかもしれません。自信のない項目は、該当するレッスンに戻って、復習させるといいでしょう。

② 教師が使う場合

この CAN-DO リストは、教師も利用することができます。この教科書を使って 1 年間指導して、生徒にどのような力をつけるのかを、年度当初にイメージし、年度途中には確認をし、年度終わりには振り返るといふ具合です。

これらの学習到達目標の達成のために、対応する教科書のタスクに取り組むのはもちろんですが、それだけでは十分ではありません。たとえば、スピーチの形式を覚えても、その中身を語れる英語力がなければスピーチができるようにはなりません。形式などの「周辺の知識」と、狭い意味の英語力という「核となる知識」とを分けて考える必要があるでしょう。後者は、言語活動を一度やったからといってできるようになるというものではなく、継続的なトレーニングが必要です。そのため、毎 Lesson の GET Drill / Practice を確実に行う必要があります。

また、生徒の自己評価の妥当性についても、実際にパフォーマンス・テストを実施するなどして、確認していかなければなりません。

さらに、冒頭に書いたように、「中・高等学校では、各学校が、学習指導要領に基づき、生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標を『CAN-DO リスト』の形で具体的に設定すること」が求められていますから、この CAN-DO リストを参考に各学校の CAN-DO リストを作ることができるでしょう。もちろん、ここにある CAN-DO ディスクリプタは想定される代表例です。ですから、この CAN-DO リストを参考にしながら、自身の指導計画をもとに、より相応しい CAN-DO リストを作成することが望めます。

最後に、CAN-DO リストといわゆる単元の評価規準との違いが問題になります。CAN-DO リストは、卒業時・学年終了時などの長期的な学習到達目標を書いたものですが、評価規準は単元ごとの実際の学習活動を踏まえた具体的なものです。評価規準に基づいた指導と評価を積み重ねて、CAN-DO リストの形での学習到達目標を達成することになります。

【参考文献】
文部科学省、「2011 年 6 月 30 日『国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的施策』」http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/1_1_icsFiles/atielddfile/2011/07/13/1308401_1.pdf

NEGISHI MASASHI
SHIBATA YASUSHI
KASHIBA HITSUKO
YAMAMOTO TAKAO
YOSHIDA HARUO
HADA TOMOKO
TAMAKA TAKEO
SATOH RINTARO
HATARI YOICHI
SANNOMIYA HARUKO
NC EDITORIAL COMMITTEE